

写真アルバムから

シリーズ A 寺社華風月（デジタル・カラー）

A2. スワンジー・ロンドン 2000

森隆一



A2. スオンジー・ロンドン 2000

1990年代に計算可能性解析という分野に興味をもち、研究してきた。また、CCA (Computability and Complexity in Analysis) 研究団体に属してきた。このCCAは毎年研究集会を開いている。2000年に

CCA Workshop 2000, in Swansea, Wales, 17-19 September 2000
に参加した。初めての海外出張である。この後定年までにE、6カ月の海外研修を2回と10回ほどの海外出張をすることになった。本シリーズの写真の大半は、これらの海外出張の際に撮ったものと、通勤時に撮ったものである。

関西からEUには、大雑把に言えば。昼前に関空を発進し、昼頃に到着する。このような言い方ができるのは、飛行時間が9時間ほどで、日本とEUとの時差が8時間(夏は7時間)程とほぼ同じことによる。なお、イギリスと日本との時差は9時間で、ドイツ・イギリスでは3月の最終日曜日から10月の最終日曜日までが夏時間となる。

スウォンジー 2000

ヒースローエクスプレスの終点パディントン駅に昼頃就いた。この駅は目的地でもあるスウォンジーを含むウェールズ地方への特急列車の発

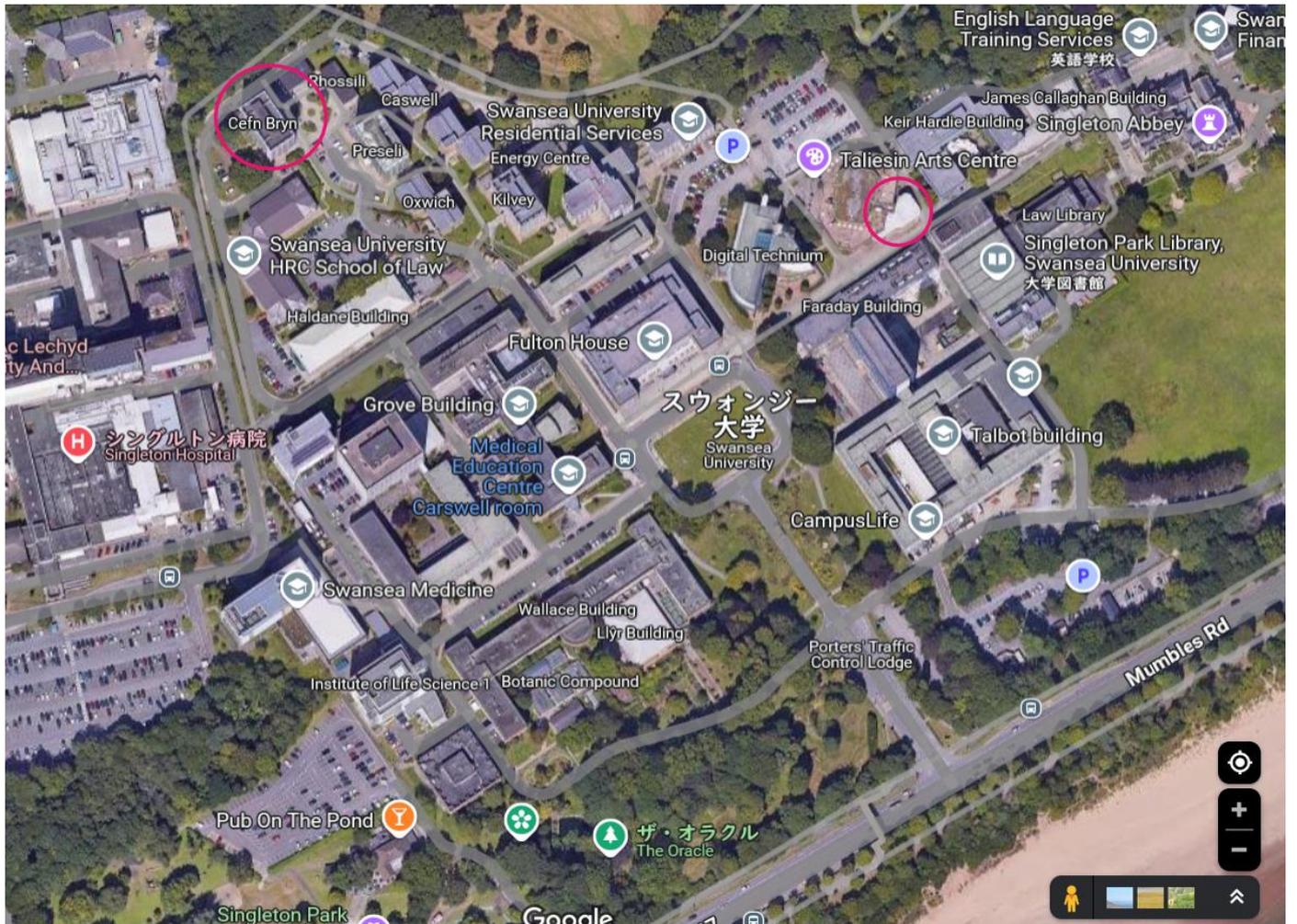
進駅でもあるので、時刻表を見て、とにかく一番早く出発する列車のキップを購入した。列車は既に止まっていて昼食をとる時間もなかったので、飲み物と菓子程度の軽食を購入し、飛び乗るように乗車した。

スウォンジーには6時過ぎに着いた。駅前には何もなかつたので、同行者の予約したホテルとにかく行き、食事をとった。このとき、この地方で造られたビールを注文したが、通じたようで、黒ビールの小瓶がでてきた。やっとたどり着いたという安心感かものすごく美味かった。今思えば、グラスビールでも(のほうが)美味かったかもしれない。

この後、キャンパス内の宿舎に向かい、1日半に及ぶ1日が終わった。

上で述べたように、旅行初日は写真を撮る余裕のあったのは列車で座っているときだけであった。景色を見ていて、写真を撮ろうと思ったときには、既にシャッターチャンスを逃している場合が殆どである。この意味では、停車する駅の構内はシャッターチャンスである。

このCCAでの講演の多くは理解できず、また、自分の研究に活かせるもなかつたので、予稿集を見て、幾つかの講演はさぼることにした。初日は午後の講演の前半をパスし、キャンパスを散策した。The Egypt Centre というものがあつた。次はGoogle Mapから切り取ったスウォンジー大学のキャンパスマップである。



かなりわかりづらいが、赤紫の円が2つ上辺に描かれている。左が宿舎で、右がThe Egypt Centreである。

Google Mapのヴァーチャル・ウォークを見ていると、25年前は前庭広場の周辺とその左(西)側部分の主な建物を造った段階と思われる。

2日目の午後、街中の旅行者でロンドンでの宿を予約したいという人がいたので同行することにした。降りたバス停はバス・センターでしっかりした屋根に覆われていた。隣接している商店街はアーケード街になっていた。冬の風雪は相当なものであろうと想った。

この商店街にあるデリカテッセン的な食堂で昼食をとった。サラダに蒸した小エビを添えたものが見つかり、感激して注文した。

食事後駅に向かった。このとき目について撮ったのが、次の写真である。



新設の集合住宅と思われる。伝統的か伝統風かはわからないが、見た目には伝統的と思われるレンガ壁の集合住宅である。

駅では次の写真のHSTという略称の高速ディーゼル列車が止まっていた。これは1976年に導入され、2017年デビューした日立製のclass800に順次置き換えられた。



駅は小高い所にあり、坂道を降りていくと、ローマの城跡が見つかる。次の2枚のうち上の写真は、港の倉庫と思っていたが

南ウェールズ&ブリストル5日間【4】 ～スウォンジー編～

(<https://4travel.jp/travelogue/10151245>)

によれば、城跡の横にある Castle Square ということである。

下の写真が城跡である。トーン・カーブ補正を施した。

城跡から降りた南西に歩くとヨット・ハーバーと赤レンガ倉庫からなる親水公園風のところにでた。河口に近いので、河から水路を通過して停泊地とし、時化に備えたようである。



次の写真は夕食会が開かれたレストランである。バスで大学から相当走ってからどう運転するのかわからないような道を通って辿り着いた。



次の写真は筆者の泊った部屋から撮ったものである。右半分を占めている建物は筆者の泊った建物は研究者用(ゲストハウス)で写真の建物は学生用ということで、両者は全く同じ造りなので代用した。柱と柱の間が1部屋とすると、短辺は4つ長辺は10個なので、1筆者の泊ったで24室となる。3階以上が宿泊筆者の泊ったとすれば、 $34 \times 7 = 238$ 室が可能である。

大学のゲストハウスは、日本の多くは宴会機能を加え〇〇会館と呼ばれている。1973に泊った北海道大学のクラーク会館は20名程度は泊れたと思っている。現在はコンクリート造りの大きなものに建て替わっている。



研究集会は数十人規模のものが最も効率的と思っている。200室規模の宿泊施設があれば、3つの同時開催が可能となる。

ロンドン 2000

帰りはロンドンで1泊することにした。初めての外国一人旅である。ということで、航空券と宿泊に関しては勤務大学に実績のある旅行社に依頼した。宿泊クーポン利用の最後でもある。パディントン駅に近くで1万円に近いところでとれたのは、下の写真の屋根裏部屋であった。



ホテルはパディントン駅から大通りにてた最初の交差点の東北の角地に位置している。

観光に充てられる時間は、1日目が3時間ほど、2日目が4時間程であった。地図を見ると、大英美術館まで2Km程なので、街並みを見ながら歩くことにした。雨が降りそうな曇った天気だった。



Google Map から、上の写真はのピカデリサーカスのようである。

ここから、大英美術館にい向かう途中見つけたのが次の写真のバーバリーの本店と思われる店である。入り口には燕尾服(?)を着た人が見えた。



上の写真は、とにかく辿り着いた大英美術館の正面である。時間も遅く30分もなかったため途中から閉館のアナウンスに追われながら、駆け抜けるように見て回った。‘これがあるのか’と思った記憶はあるが、それがどんな絵であるかなどは全く思い出せない。

美術館をでたあと、周辺を廻りながら考え、とにかくテムズ川の岸辺にでることにした。次の写真の船上レストランが目についた。



この後は宿に戻ったのだが、その経路は覚えていない。次の2枚の写真はこのとき撮ったもので、上は不明位であるが下はKings Collegeと思われる。



翌日は大英博物館に行くことにした。

写真に付けられた番号からは陶磁器のフロアーにまず行ったようだし、そのような気もする。メソポタミアの陶器と中国・朝鮮・日本の磁気のコレクションが印象に残っている。

次の写真は有田焼と思われる。



この後は、1階を見て回った。小学生の幾つかのグループがスケッチをしていた。





上の写真は有名なロゼッタ・ストーンである。

飛行機に間に合うには、3時ごろには宿に着きにバッグを受け取る必要があった。そこで、昼食後は宿までゆっくりめに歩くことにした。

基本的にはオックスフォード通りにでて西に進むことになる。



上の写真は、おそらく、オックスフォード通りにでるまえに見かけた London University Press の直営店と思われる建物である。

次の写真は、Google Map から、マーブルアーチとよばれ、オックスフォード通りの終点と思われる。この門をくぐった記憶がないので、オッ

クスフォード通りと並行する通りを歩いたのかもしれない。ソーホー辺りで変わったのかもしれない。とすれば、上の写真の位置も変わってくるが、詳細は覚えていない。



この左手に、上部に Decca の文字が見られる建物があった。これがデッカ・レコードの本社かと思ったことは記憶している。

次の2枚はハイド・パークである。人は殆ど見られず、アイスクリーム屋が暇そうにしていたのもあり買って食べた。

